

新型コロナウイルス感染拡大が スモン患者の療養生活に及ぼす影響

久留 聡[†]

IRYO Vol. 75 No. 5 (457-463) 2021

要 旨

新型コロナウイルス感染拡大がスモン (subacute myelo-optico-neuropathy : SMON) 患者の療養生活に及ぼす影響についてアンケート調査を実施し、現状の把握を行った。

2020年7月にアンケート調査票をスモン患者1,037人に郵送した。調査項目はコロナ感染の有無、感染拡大による診療への影響、在宅サービスへの影響、日常生活への影響、支援の有無、健康状態の変化についてである。

アンケートは552人からの返送があり回収率は53.2%であった。回答者の平均年齢は 82.1 ± 8.5 歳であり、男性131名、女性421名であった。新型コロナウイルスへの感染者はいなかった。診療への影響ありは122名 (22.1%) であり、通院回数の減少、投薬のみや家族受診、電話受診への変更、リハビリテーションの減少、鍼灸の回数減、面会制限・禁止などであった。日常生活への影響ありは240名 (43.4%) であり、外出制限、面会制限、人との接触減少、買物の不自由さ、物品調達困難、運動不足、ストレス、不安などであった。健康状態の変化ありは193名 (34.9%) であり、歩行機能の低下、筋力低下、気力や体力の低下、痛み・シビレの増強、孤独感、不安、抑うつ、易疲労、認知機能低下などであった。

スモン患者の多くは歩行障害や感覚障害を有しているが、コロナ禍により通院が減り、訪問診療やリハビリ、鍼灸の回数が減少したことによる症状の悪化がうかがわれた。また、外出制限や面会禁止により人と接触する機会が大幅に減少したことにより精神面や認知機能にも影響が出ていると考えられた。今後心身両面への対策が必要である。

キーワード 新型コロナウイルス, スモン (subacute myelo-optico-neuropathy), アンケート

はじめに

スモン (subacute myelo-optico-neuropathy : SMON) は、1960年代に日本で多発した中毒性神経疾患である¹⁾。腹部症状が先行し、下肢末端から上

行する異常知覚・感覚障害、痙性麻痺、視力障害をきたす。1970年に整腸剤キノホルムが原因であると判明し、同剤の販売中止後は新規患者の発生はない。しかしながら、現在も多数の患者が後遺症に苦しんでおり、「スモンに関する調査研究班」を中心に検

国立病院機構鈴鹿病院 脳神経内科 [†]医師

著者連絡先：久留聡 国立病院機構鈴鹿病院 脳神経内科 〒513-8501 三重県鈴鹿市加佐登3丁目2-1

e-mail : kuru.satoshi.rb@mail.hosp.go.jp

(2021年2月15日受付, 2021年6月16日受理)

The Impact of COVID-19 on the Life of Patients with SMON

Satoshi Kuru, NHO Suzuka National Hospital

(Received Feb. 15, 2021, Accepted Jun. 16, 2021)

Key Words : COVID19, SMON (subacute myelo-optico-neuropathy) , questionnaire

診などの恒久対策が行われている。

2019年に中国の武漢から始まった新型コロナウイルス感染は、急速に全世界へ広がりパンデミックとなった。これにより、われわれの生活はさまざまな面で大きな影響を受けることとなった。筆者は「スモンに関する調査研究班」の主任研究者を務めているが、班活動の一環として、新型コロナウイルス感染拡大によってスモン患者の療養生活にどのような影響があったかについてアンケート調査を行った。

方 法

2020年7月にアンケート調査票をスモン患者1,037人に郵送した。調査の項目は新型コロナウイルスへの感染の有無、感染拡大による診療への影響、在宅サービスへの影響、日常生活への影響、支援の有無、健康状態の変化についてである。それぞれの項目で「あり」「なし」を選択し、「あり」の場合は具体的内容を記載する形式とした。

本研究は、国立病院機構鈴鹿病院倫理委員会の承認を得た。(承認番号2020-02)

結 果

調査票の送付総数は1,037通であり、このうち宛先不明で配達不能が5名、死亡されていたとの連絡があったのが4名あり、実送付数は1,028通であった。回収総数は553通(回収率53.2%)であったが、1名が研究に不同意であったため、残りの552名で解析を行った。

552人の内訳は、男性131名、女性421名であり、平均年齢は82.1 ± 8.5歳であった。地域別では北海道38名、東北47名、関東・甲信128名、東海・北陸61名、近畿107名、中国・四国132名、九州39名であった(図1)。回答者の身体状況としては「支えなしで歩行可能」が32%、「装具・支持があれば歩行可能」が37%、「歩行不能(坐位保持可能)」が20%、「坐位保持不能」が7%であった。生活形態では「主に自宅」が75%と圧倒的に多く、ついで「主に施設」が17%、「主に病院」が4%であった(図2)。

1. 感染の有無

新型コロナウイルスへの感染は、無しが533名、無回答が19名で感染者はみられなかった(図3)。

2. 診療への影響

診療への影響ありは122名(22.1%)であった(図3)。ありと回答された方の内容の自由記載では、通院回数の減少が最も多く(29名)、ほかに投薬のみ(10名)や家族受診、電話受診への変更(9名)、リハビリテーションの減少(10名)、鍼灸の回数減(4名)、面会制限・禁止(13名)、などであった(図4)。

3. 在宅サービスへの影響

在宅サービスへの影響ありは44名(7.9%)であった(図3)。内容の自由記載では、訪問診療、デイサービス、リハビリ、鍼灸、マッサージの休止、回数減、時間短縮などが挙げられ、ほかに面会の禁止・制限、衛生物品の不足、サービスは継続しているものの感染への気遣いなどが挙げられた。一方で、コロナ禍でもサービスが継続され助かっているという感謝の言葉の記載もみられた。

4. 日常生活への影響

影響ありが193名(35.0%)、無しが31名(5.6%)、無回答328名(59.4%)であった(図3)。影響の内訳は外出減少(54名)、面会禁止・制限(31名)、人との交流減少(29名)、運動不足・体力の衰え(19名)、買い物の不自由さ(19名)などが多く、ほかにもさまざまな回答があった(図5)。

5. 支援の有無

支援ありが71名(12.9%)、無しが58名(10.5%)、無回答423名(76.3%)であった(図3)。支援の内訳は、「マスク」、「10万円」が多かったがコロナと直接関係のない回答もみられた。

6. 健康状態の変化

変化ありが193名(35.0%)、無しが31名(5.6%)、無回答328名(59.4%)であった(図3)。変化ありの内訳は、運動機能低下(45名)、体力低下(17名)、感覚異常悪化(15名)、痛み(腰、膝、下肢)(14名)が多く、その他無気力・気力低下、物忘れ・認知機能低下、食欲低下などが挙げられていた(図6)。

考 察

新型コロナウイルスが世界的に大流行し、社会全体に甚大な影響が及んでいる。とくに高齢者や基礎疾患を有する者が重症化しやすいため、スモン患者

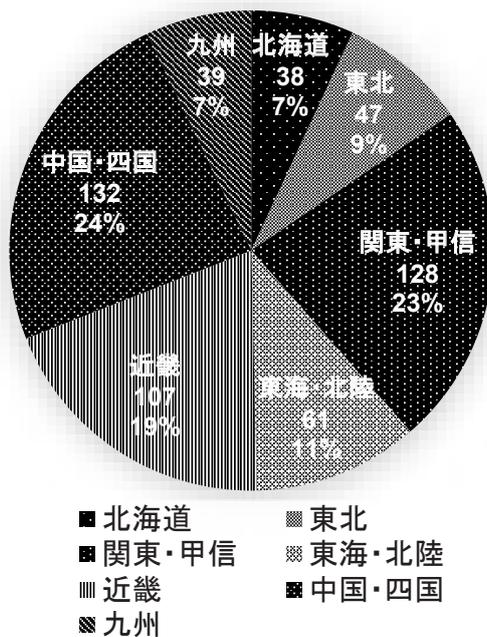
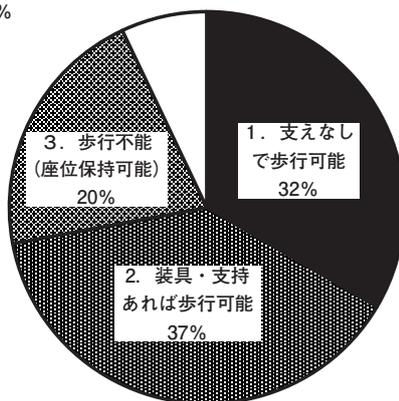


図1 地域別回答数

身体状況

4. 座位保持不能
7%



生活形態

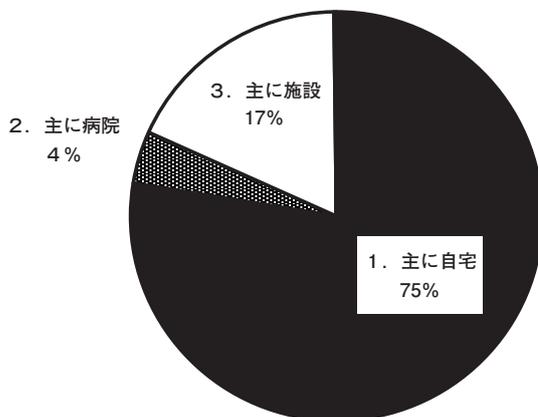


図2 身体状況と生活形態

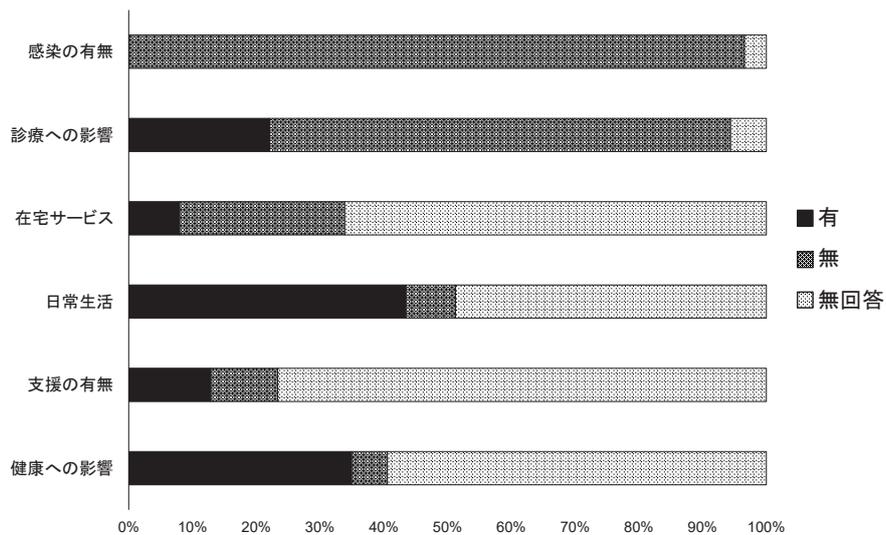


図3 新型コロナウイルス感染拡大の影響

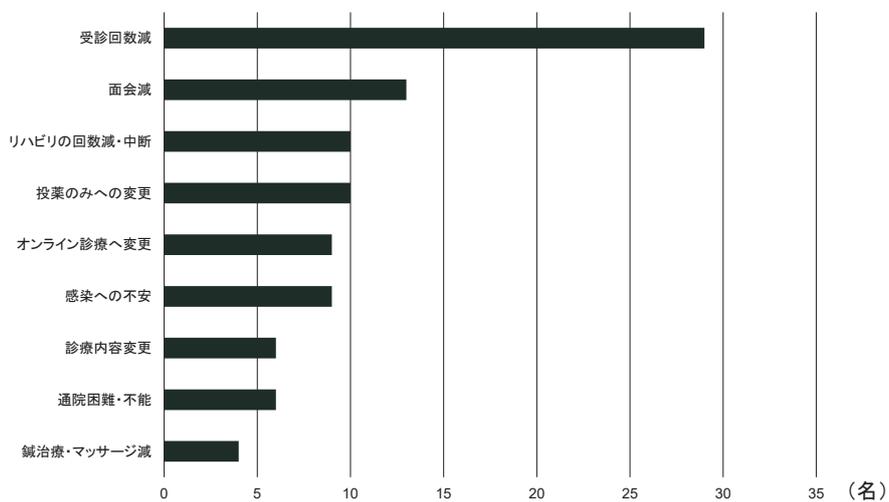


図4 診療への影響

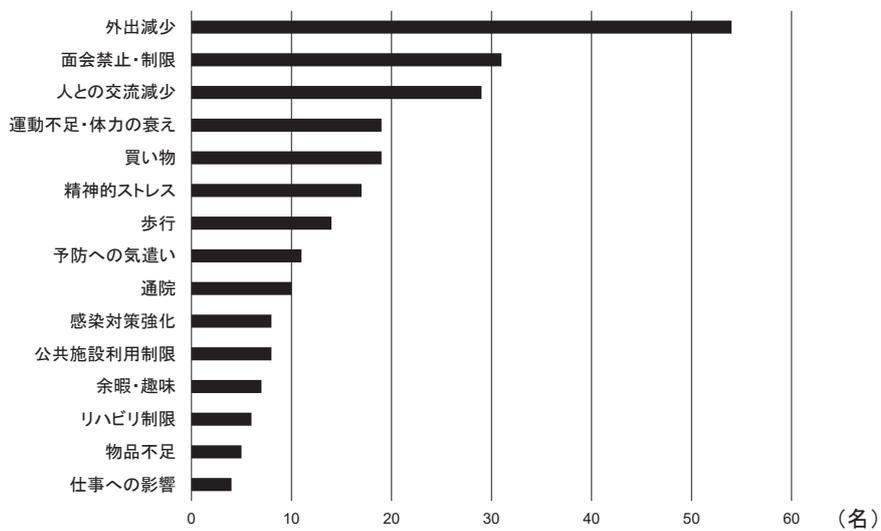


図5 日常生活への影響

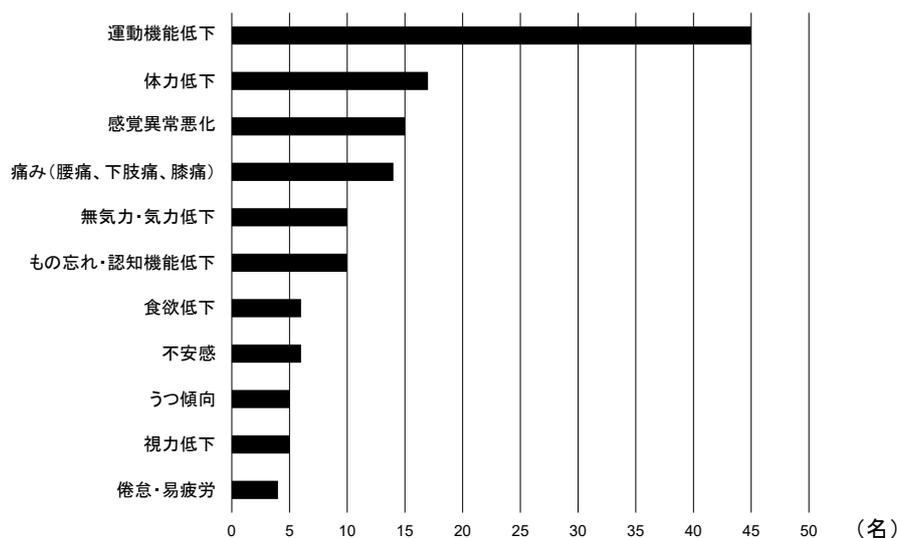


図6 健康状態の変化

は感染に対し最大限の警戒を要する。幸いにも、本調査の結果ではスモン患者の新型コロナウイルス罹患患者は認められなかった。しかしながら、本稿執筆時点でまだ感染は猛威を振るっており引き続きの注意が必要である。

本調査は、感染の第1波と第2波の間の令和2年7月に実施した。感染第1波に際し3月には全国で一斉に学校の休校、4月には緊急事態宣言が出されるなどさまざまな対策がなされた。その効果で発生数は抑えられたと推察されるが、「ステイ・ホーム」、「不要不急の外出制限」「三密回避」が求められるなど日常生活は著しく制限された。

今回のスモン患者への調査では、診療への影響ありが22.1%、在宅サービスへの影響ありが7.9%、日常生活への影響ありが35.0%、健康の変化ありが35.0%という結果であった。診療への影響としては、受診回数の減少、電話受診・家族受診への変更の回答が多くみられた。医療機関での感染を恐れての自主的な受診控えや行政からオンライン受診が推奨された結果と考えられる。スモン患者では定期的なりハビリテーションや痛み・シビレに対しての鍼灸を行っている患者が多いが、その回数が減少したという回答がみられた。また入院・入所患者においては、家族や知人との面会の制限や禁止の措置がなされていた。在宅サービスへの影響として訪問診療やデイサービスの時短や休止、回数減などの回答がみられた。日常生活への影響としては、外出減少、面会禁止・制限、人との交流減少、運動不足・体力の衰え、買い物の不自由さなどの回答が多くみられた。支援

としては給付金としての10万円やマスク給付が回答として多く挙がっていた。

健康状態の変化としては、運動機能低下が最も多く、ついで体力低下、感覚異常悪化、腰、膝、下肢の痛みと続き、無気力・気力低下、物忘れ・認知機能低下などの精神面や知的能力に関する回答も挙がっていた。スモンの主たる症状（後遺症）として運動機能障害があるが、コロナ禍による外出制限や運動不足、十分なりハビリテーションを受けられないことなどにより悪化傾向となった可能性が考えられる。感覚異常の悪化や痛みの増強も、やはり運動不足や、鍼灸やマッサージなどが今までのように受けられなくなったことが関係しているのかもしれない。また、人との交流の減少や面会制限が精神面や認知機能に悪影響を及ぼしたとも推測される。実際に、本邦において認知症患者がコロナ禍で症状の悪化がみられるとした報告²⁾や、アメリカにおけるうつ病の有病率の増加が報告されている³⁾。このように、今回のコロナ禍でスモン患者に感染者こそ出していないが、厳しい感染対策により診療、在宅サービス、日常生活にさまざまな面で大きな制約が強いられ、その結果としてスモン患者の療養生活に負の影響を及ぼしたと考えられる。また、一般地域高齢者におけるCOVID-19流行前後の健康関連QOL変化をみた調査では、70歳代で「社会性機能」と「心の健康」の項目で得点の低下がみられる一方で、「身体機能」の主観的評価はむしろ改善する傾向があると報告されている⁴⁾。スモン患者は後遺症として運動機能障害、感覚障害を有していることが一般高齢

者との差につながっていると推測されるが、今後、さらに詳細な検討が必要であると考え。

感染防止の観点から、さまざまな業務や社会活動が「リモート」や「オンライン」で実施されることとなった。しかしながら、医療や介護では感染拡大が急速に進んだこともあり、まだリモート化・オンライン化への整備は十分ではない。とくにスモン患者の平均年齢は80歳を超えており、情報通信技術（ICT）の利用には個別のサポートやインフラ整備が不可欠である。また、当然のことながら現状のオンライン診療やサービスには限界があり、対面でのみ可能な情報伝達や、検査、リハビリ、鍼灸、マッサージ、身体介護などを、感染に留意しながら継続して実施していく方向性を検討すべきである。さらに精神面や認知機能の面への影響も大きいと思われる。スモン検診の結果では、高齢化とともに認知症合併の比率が増加しており、令和元年は15%であった⁴⁾。コロナ禍における外出制限や人的交流の減少、面会制限が認知機能にどの程度影響しているかを分析し、悪化防止への対策が必要である。

COVID-19感染状況は常に変化しており、地域によっても大きな差があり時期ごと、地域ごとでの適切な対応が必要である。第1波の頃に比べてウイルスに関する知見も増え、より効果的な対策方法が模索されている段階である。高齢でさまざまな後遺症、合併症を抱えるスモン患者に対しては、引き続き万全な感染対策を講じながらも、過剰な対応により

ADLやQOLが損なわれることのないようにすべきであると考え。

著者の利益相反：本論文発表内容に関連して申告なし。

[文献]

- 1) 久留 聡. スモン原因解明から50年 臨神経 2021 ; 61 : 109-14.
- 2) 日本認知症学会社会対応委員会COVID-19対応ワーキングチーム. 日本認知症学会専門医を対象とした新型コロナウイルス感染流行下における認知症の診療等への影響に関するアンケート調査結果報告 Dementia Jpn. 2021 ; 35 : 73-85.
- 3) Ettman CK, Abdalla SM, Cohen GH et al. Prevalence of depression symptoms in US adults before and during the COVID-19 pandemic. JAMA Netw Open 2020 ; 3 (9) : e2019686.
- 4) 佐藤洋一郎, 大内潤子, 林 裕子ほか. 新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) 流行初期における地域高齢者の健康関連QOL. 理療科 2020 ; 35 : 813-8.
- 5) 久留 聡, 新野正明, 千田圭二ほか. 令和元年度検診からみたスモン患者の現況 厚生労働科学研究費補助金 (難治疾患克服研究事業) スモンに関する調査研究班・令和元年度総括・分担研究報告書 p.27-31.

The Impact of COVID-19 on the Life of Patients with SMON Subacute Myelo-Optico-Neuropathy

Satoshi Kuru

Abstract

We conducted a survey on patients with subacute myelo-optico-neuropathy (SMON) (n = 1037) to determine the effect of the coronavirus disease (COVID-19) on their quality of life after recuperation. The questionnaire included COVID-19 infection, impact on medical care and domiciliary service, public support, and changes in health condition. The response rate was 55.2% (n = 552; men, 131 and women, 421). The mean age of the respondents was 82.1 ± 8.5 years. None of the patients had COVID-19. Positive answers were obtained in 22.1%, 43.4%, and 34.9 % of the respondents for the impact on medical care, impact on daily life, and changes in health condition, respectively. The impacts on medical care consisted of reduction in the frequency of hospital visits and rehabilitation, visit prohibition, and change in the form of consultation. The impacts on daily life included restriction of outdoor activities, reduced contact with other people, difficulties in shopping, and insufficient exercise. The changes in health condition consisted of worsening of walking ability and muscle strength, decreased energy, exacerbation of pain and sensory disturbance, anxiety, depression, fatigue, and cognitive decline. This survey revealed that the COVID-19 pandemic has exacerbated specific symptoms of patients with SMON due to the lack of medical care. In addition, patients with SMON have also been affected cognitively and psychologically. Thus, patients with SMON should be provided with both physical and mental support.